

# マイネッケにおける Nation の問題 (一)

西 井 克 己

- 一、はしがきーランケ以後ー
- 二、マイネッケの Nation 理解 (以上本号掲載)
- 三、マイネッケの問題意識 (以下次号掲載予定)
- 四、晩年のマイネッケ
- 五、むすびーマイネッケの良心ー

## 一、はしがきーランケ以後ー

「ランケの欠陥は、積極的な点よりも、寧ろ消極的な点にある。彼の同時代人たちは、彼らが見出したものよりも、見出しえないものについて不満を述べた。熱烈な民族主義者は、彼の世界主義的平靜さを、道徳家はその倫理的中立性を、また唯物論者たちは、彼の雲のかかった超越主義を悲しんだ。例えば、ドロイゼンは宦官の客観主義と嘲笑し、トライチュケは、時折の雲にも殆んど蔽われることのない、然し高貴な生れで、且つ洗練された人々の上品な仲間を照している柔かい光について、厳しく批判的に書いている。：モムゼンは、彼の九十歳の誕生日に、抗議の気持ちを心に秘めて、『貴方はわれわれすべてのものの中で最も寛大な人である』と述べた。：ジーベルは、ニープールの

最奥の感情は倫理的であつたのに、ランケのそれは美的であり、且つランケは政治家の眼をもつてではなく、芸術家の眼をもつて眺めていることを遺憾としている。このような判断は、批評家が、彼と対立する学派に属していることを示しているが、然し最も忠実な彼の弟子たちも、この太陽に黒点のあることを認めている。即ち彼の調和的な性質は、ある程度感情の大きな波や情熱の爆発、生命の高揚や墮落に対して彼を盲目にした。：彼には会議室の窓から余りに眺めすぎて大衆を無視し、経済的な圧力を見落す傾向がある。：後の時代が、彼の理論と実行を越えて進んだのは、特に社会の進化について、より大きな注意が向けられるようになったからである。<sup>(2)</sup>

「十九世紀の史学及び歴史家 (History and Historians in the Nineteenth Century)」の著者グーチは、このように、ランケ史学の問題点及び批判者の説を紹介しつつ、なおランケ以後のドイツ史学の行方を、それにつづく「ランケの批判者たちと弟子達」、及び「プロイセン学派」の章において辿ろうとする。<sup>(3)</sup>

今これを、ただドイツの史学史のみについて述べているベローに従つてやや詳細にみるならば、彼は、「革命（一八四八年―筆者）の直前及び以後から、真の風格をもった一群の歴史家が抬頭した。彼らは、ランケとは勿論ある対立関係になつてはいるが、然し上に特色づけた著者たちとは更らに遙かに違つていた。われわれは彼らを、『政治史家、あるいは自由主義的歴史家、ないしは小ドイツ史家と呼んでいる。これらの歴史叙述家は、プロイセン国家の保守政策の拒否を通じて勢力を得、且つ永い間かかる立場を固持したので、人々は第二の自由主義的歴史家の特徴づけを選んだ。然しこの呼び方は、彼らがもっと広汎な活動を伴つたので、自由主義の單純な枠内に入らないし、一部分は直接自由主義と斗つたので、その意味を全くよく現わしている第一の呼び方、あるいは實際的目標に従つて第三の呼び方が選ばれるべきであらう。これらの政治史家たちは、然し當時はまた、而も正しく力強く『ロマン主義』に対する斗争を行つたのである。尤も政治史家の「より多数の者は、ランケ門下であり、彼らのうちランケの方法を無視するものは誰もいなかった。彼らは、ロマン主義時代の学問的利得を悉く利用した。その特質は力強い活動力、

即ち具体的な政治目標の樹立にある。その目標とは即ち立憲制度、民族的な国家の形成、プロイセンによる政治的に統一されたドイツ帝国の再建にある。その政治目標の第一となったものは立憲制度であり、ついで統一されたドイツ国民であった。彼らは、自由主義的ドグマの多くの偏見から徐々にしか脱脚しなかったけれども、然し抽象的な憲法狂ではなく、与えられた諸關係を考慮に入れ、強力な国民国家を求めた。「ランケと政治史家との實際的、政治的対立は、私が既に述べ来たところから明かである。ランケが保守的な国民国家の理念から、ドイツの連邦制度の仕上げに賛成ではあったが、各邦、殊にプロイセン国家、而してその権力の基礎を擁護したのに反して、政治史家にとっては、立憲制度の採用によって与えられた変化、及び、多かれ少かれ既存の国家権力の直接的な崩壊によって遂行されねばならないように見えたドイツの統一が関心事であった。両者の距離は、政治史家にとって憲法変更の必然性の眼目が前面に現われ、かくて全体の自由主義と大きな共通的基盤をもった時に、最も大きなものとなった。：ランケの読者が最も少なかったのはこの時である。政治史家たちは、自由主義の大衆の間に『卑屈なもの』と考えられたランケを、合理主義的反動の代表者とともに遙かに凌駕した。その大部分が勿論彼の門下ではあった政治史家たち自らが、ランケを常に尊敬の念をもって迎えたとしても、ランケへ反対という事実に対しては何ら疑いも抱かなかった。然しその相違は徐々に緩和されて来た。政治史家のあるものは早く、他のものはそれより遅く、またあるものは完全に、他のものは少くとも事柄の本質についてそうである。政治史家たちが、ドイツの統一はプロイセンの破壊によってではなく、プロイセンをドイツにおける指導的王政へとたかめることによって達成せらるべきであると認めた時には、彼らは正しくそれで保守的な国民国家観念に接近した。そのような接近は、全ドイツにとっての問題解決の困難さによってだけではなく、各邦内の憲法斗争によっても同様に妨げられながら、段階的に行われた。この差異は、實際政治的問題が遂に解決せられた時に、而もランケの意味において、且つ政治史家のランケの實際政治的観点への接近とともに減少した」。「政治史家たちのビスマルクの政治への接近は、彼らが絶えず歴史法学派の原理を信じてい

たことのために、また彼らが、保守的仲間の中にあつて正統主義をぐらつかせることに努めると同時に、絶對的な妥当性への要求をもつて登場する自由主義的且つ民主主義的なすべての信条を拒否したランケの歴史記述の影響下にたつことによつて容易となつた。このことは、新しい憲法の制定がドイツにおいて行われたのだから、正しく大きな理念の進歩であつた。即ち、構成的な考から經驗的な考への、また觀念的、思弁的なものから現実的な考への進歩であつた。新しいドイツの中にわれわれは、一つの憲法はすべての国民に対して妥当しうるものではなく、寧ろ一つの國家の憲法はその國民の特殊な諸關係に相應すべきものであるという歴史法学派の根本思想の大きな實現を見る。

…政治家は今や、保守的な側になつて自由主義に反対の中核となつたものに喜んで共鳴した。…實際政治的諸問題の中でのランケと大多數の政治史家との間の対立が、既に暗示されたように、遂に殆んど和解したとすれば、それはまた學問上の差異、歴史敘述家の課題についての考の中の相違を緩和するのに貢獻した。一八八六年のジューベルのランケ追悼演説は、實際一八五六年の講演發表に対する一つの緩和を示している。…尤も差異は原則的に凝固したのかも知れない。この論争の中でも、ランケが勝利者であることが明らかとなつた」。「政治史家は、自由な國家の完全な建設という前提の中で逸やりすぎたので、その頑固さにおいて、またドイツは軍事的に征服されず、ただ政治的に、即ち『道徳的』征服を通してえられるという原則をもつてビスマルクの實際的政策と衝突した。然し彼らがビスマルクの道を正しいものとして認めたことは、彼らの偉大な自己克服であつた。だがかかる實際的經驗は、彼らから、少くとも獨立的な道徳的見解を奪わなかつた。ジューベルは、終始個々の事實の道徳的評價を要求した。國家の實現は、ドイツの理想主義的哲學の情熱から、トライチュケによつて、政治についての彼の講義の中で、以前から道徳化として扱へられた。社会的諸權力による肥大化に対する彼の國家弁護は、既に彼の理想主義的動機を示している。…最善の國家についての教を拒否したことの中で、また夙にその信条からしても、ドロイゼンは更らに注目すべき徹底した歴史家であつた。國民國家的觀念が特にかかる認識をもつよう彼を助けた。而も彼が如何に現在の諸問題の觀

察から、過去に対するたかめられた理解をうることを知っていたかは、注目に値する。プロイセンの指導によるドイツ統一の必然性が、ドロイゼンに、末期のギリシア文化の諸関係の正しい評価に対する眼を開いた。ドイツにおけるオーストリアとプロイセンの敵対関係は、ギリシアにおける覇権問題を彼に理解せしめ、逆に後者の考察は、彼にプロイセン・ドイツの考えを強めた。政治史家たちは、そのプロイセンの性格を、独りドロイゼンに負っているのではない。然しドロイゼンは、プロイセンはドイツにおける指導権をとるべきであるとの要求に、最も広汎な文献の基礎づけを与えたのである。『国民国家的思想からジーベルは、彼の国民のために独立と自由な運動を要求したが、然し同じ程度にそれらを他の諸国民にも認め、且つ追求された異国民への支配の中に自国民の損害を見た。かくてジーベルは、歴史的考察の普遍的な、従って正しく客観的な立場をえたのである。このような認識は、正しくドイツ国民感情の発展経過を通して準備されたものであった。即ちかかる国民感情は、大部分抑圧的なフランスの世界支配に對する斗いの中に起り、異国の領有で苦しんでいるオーストリアはドイツの統一に反対した。然しドイツは、フランス革命のやり方にならうて解放を他の諸国民への支配におきかえなかつたことによって、無類の節度をえたように：ドイツ史学もまたここで公平の普遍的立場を求め、見出した。：實際の政治目標においては、ジーベルとギーゼブレヒトとは、互いに殆んど意見は異ってはいない。前者は後者と同様、非常にプロイセン・ドイツ的に考えていた。『学問に對する最も広汎な作用を及ぼした学者として、われわれは政治史家の中ではモムゼンを尊敬する。：だが読者に政治的に働きかけようとする彼の希望、及び民族的理念と強力な国家権力によるその実現のための彼の責任感とは、彼をも政治史家の列に加える。彼のローマ史は、全くかかる精神を吸収している。われわれは、彼のビスマルクやトライチュケに對する晩年の氣むつかしい無益な立場によって、政治的に彼を判断してはならない。初期において彼は、ジーベルやトライチュケと同じ仲間であった。国民国家的理念は、彼の著作に有効に働きかけた。而して『政治史家の指導者の中では最も若い人、即ちハインリヒ・フォン・トライチュケは、歴史敘述家としては彼らの中で拔

んでている」と説き、また更らにつづけて、「一八七八年以後われわれは、ドイツの歴史敘述の發展の中に、一つの新時期を与えるべきである。今や歴史家たちは、従来なかったような程度で文化史、殊に經濟史の研究に向うことによって自らの領域をひろげた。然しそれは、彼らがいれば政治史に対立するようなやり方ではなく、彼らはこのような研究を本質的には政治的見地にたつて、即ち国家と經濟との相互作用の見地、更らに言えば、国家による經濟の影響強調の見地にたつて行つた。一八七八―七九年の間に經濟史の驚くべき数にのぼる論著―それには經濟政策史の研究も少くはない―が發表された。国家に最も近い關係にたつてゐる文化の諸部門、即ち經濟、行政、そして數年後には憲法が最も熱心に研究されたということは、この時代の特徴である。一八七九年にトライチュケの『十九世紀ドイツ史』の第一巻が出た。その出版に際し、直ちに注目されることは、文化史と政治史とは従来よりも遙かに内面的に結合して敘述されてゐるということである。然しこのような内面的結合は、文化現象への配慮がその規準を國家への關係において見出すことによつて行われたのである。トライチュケの『ドイツ史』は、歴史敘述の新らしい方式をもたらし、且つ同時にそれを象徴してゐる。その結果、素材の豊富化となつたが、それはあくまでも政治的考察の範圍内においてで」あり：「ドイツ國民及びその諸部族の特殊性をその生活のあらゆる刻印の中に示そうとする彼の努力は、傑出してゐる」。そして、かかる「歴史的發展の轉換期は、ドイツの内政史の轉換期と一致してゐる。即ちそれは、ビスマルクの新保守主義的内政史の時代にあたる。その頃始めて、われわれが注意したように、一八七〇―七一年の偉大な出来事が、全ドイツにとつて稔りあるものとなつた。今や始まつた運動の特徴は、政治的並びに經濟的なマンチェスター主義への斗争、國民的理念の精力的な把握、より強力な社會的緊張、國家活動の拡大と國家權力の強化、國民國家の經濟的自立の回復、及び、教會的並びに宗教的な要素の新らしい評價などにある。同時代の歴史敘述の中には、同じような問題と考へが現われた」とも述べており、その間の消息をなおよく窺ふことが出来る。而もその際、何よりも強く私の関心をひくものの一は、ランケ以後のドイツ史學もまた、Nation—民族・國民—の觀念ないし

は意識と不可分離の關係にたっているということである。

このように、ドイツにおける民族・国民觀念の問題を、ランケ以後のドイツ史学そのものに限ってみても、検討すべき問題が多々あるこというまでもない。それらについては何れ後日を俟ち、なお卓見の發展を期したいが、ここではただ、マイネッケにおける Nation の問題を中心として些か考えてみたいと思う。けだしランケとマイネッケは、ドイツ史学史上、二大支柱として、多年わが国にも深甚な影響を与えただけではなく、なお充分今日的な意味をもつとともに、永年自らの問題解決の苦悩を彼らと一緒に抱きつづつあった私自身また、その鍵を彼らに求めること極めて多且つ切であつたからでもある。その際、先にランケの民族觀について見た私には、その後ドイツには、国民国家の建設としての第二帝国の樹立を既にみたが、やがてビスマルクは隱退して皇帝ヴィルヘルム二世の親政となり、第一次世界大戰に突入する等々の諸事件が慌しくも繰りひろげられ來つた、従つてマイネッケにとっては、ランケの場合と異り、形成されようとする民族ないし国民よりは、寧ろ形成されたドイツ民族、あるいはドイツ國民がもつ問題の方に多く関心が寄せられつつあることを絶えず念頭に浮べながら、中山治一、林健太郎、矢田俊隆、島田雄次郎、岸田達也氏らの優れた研究にも示唆されたが、それらは必ずしもマイネッケにおける Nation の問題のみを追求したものではない。拙稿に少しなりとも意義あらば幸せである。

① 私は Nation を民族・國民とも、また煩を避け、ただ単に適宜民族、あるいは國民とも訳したが、Volk も一應國民や民族と訳した。その際マイネッケが、「われわれは恐らく、人々が Nation の中に光、高さ、人格へ押しあがるような概念をもっているが、Volk の中には寧ろ受動的で、植物のように成長する、而も勤勉な隷屬を宣告された存在に対する表現を抱いていた」といつて差支えないであらう」と述べていることに、そのニュアンスの差をも注意したい (Meinecke, *Weltbürgertum und Nationalstaat*, 7te Aufl. München, 1922. S. 24)。また Nationalist も時により民族主義者、国家主義者―従つて Nationalismus も民族主義、国家主義なりと訳した。

② Gooch, *History and Historians in the Nineteenth Century*, 2nd Ed. London, 1952. p. 52.

③ Gooch, op. cit. p. 98 ff.

- ④ v. Below, Die Deutsche Geschichtsschreibung von den Befreiungskriegen bis zur Unseren Tagen. München, 1924. SS. 42-43, SS. 56-59, SS. 45-46, SS. 48-49, SS. 51-54, SS. 84-85.
- ⑤ ホーファーは「マイネッケの道はランケから出てマルクハルトにいたつた」と述べ (Hofer, Einleitung des Herausgebers zu 'Meinecke, Die Idee der Staatsräson in der Neueren Geschichte. Meinecke Werke (以下 M. W. と略す) I. München, 1957 "S. XII)' またケッツは「二十世紀前半のドイツの歴史学は、フリードリヒ・マイネッケの中に、最も稔り多き代表者を見出したのみならず、近代歴史学の基盤を最も基本的に探究し、且つ近代の精神生活との関連を確立した研究者を見出した」と述べてゐる (Goetz, Friedrich Meinecke. Leben und Persönlichkeit. Historische Zeitschrift (以下 H. Z. と略す) Bd. 174. Heft 2, S. 250)。
- ⑥ 拙稿「ランケと民族」・「歴史学研究」第一三〇号三三頁以下、または拙著「世界史の成立」一九六頁以下。
- ⑦ ここではこの拙稿に關係の深い若干のものをあげるにとどめたい。中山治一氏「マイネッケに於ける歴史の論理」・「西洋史説苑」(四〇七頁以下。林健太郎氏「フリードリッヒ・マイネッケ」(一)(二)・「歴史学研究」第四卷第四号三頁以下、同五号二頁以下、同六号七七頁以下。同氏「歴史主義の發生について」・同誌第八卷第一号五九頁以下。同氏「最近のフリードリヒ・マイネッケ」・同誌第十一卷第八号八〇頁以下。矢田俊隆氏「フリードリッヒ・マイネッケ」・「自由主義思想十講」三〇三頁以下。島田雄次郎氏「ヒストリッシェ・ツァイトシュリフトの回想」(上)(中)(下)・「史学雑誌」第五十九編第七号六九頁以下、同八号八三頁以下、同九号六四頁以下。岸田達也氏「マイネッケの歴史意識の限界」・「史学雑誌」第六十二編第十一号四二頁以下等々。

## Ⅱ、マイネッケの Nation 理解

ところでマイネッケは、Nation を一体どのように理解しているのであろうか。これを先ず知ることが問題解明への第一歩であることいふまでもないが、その際われわれには、何よりも始めに、彼の「偉大な理念史的著作の三部作」の最初の業績たる一九〇八年初版の「世界市民主義と国民国家 (Welbürgertum und Nationalstaat)」について見なければならぬ。



「諸国民は、一見したところ、永い発展の中で歴史的に成立し、且つ不斷の運動と変化を行っている大きく力強い生活共同体であるが、然しそのため国民の本質はまた何らか流動的なものをもっている。共同の居住地、共通の血統：より厳密にいえば、共通ないしはよく似た血の混合、共通の言葉、共通の精神生活、共通の国家的結合か、多くの同じような国家の連合、すべてこれらのものは、一つの国民の重要且つ本質的な基礎ないしは目印たりうるものである。然しそれだからといって、どの国民も一つの国民たりうるためには、それらをすべて一緒にもたなければならぬといへない。国民の中には、確かに血の類似によって生じた自然的な核が無条件に存在すべきである。これに基づいて、異った種族や要素が同化されるのを可能ならしめるようなもの、即ち固有にして内容豊かな精神的共同体、及びそれについて多かれ少かれ明瞭な意識が生ずる。然しかかる、より高い共同体は如何にして成立し、且つその内容は如何なる性質のものであったか。それについては、一般的な体験法則は何らわれわれを教えてくれず、ただ具体的な個々の場合の検討だけが教えてくれる。：われわれの研究もまたそのように望んでいるが、然しそれがなされるためには、われわれの研究は、諸国民の本質及び生成の中の一般的類型と傾向について區別しうるものについての少くとも総括的な定位が必要である」。

冒頭このように説くマイネッケの方法論ともいふべき普遍と特殊の問題も興味深いが、彼が Nation、即ち民族ないし国民を動的、歴史的に把握しようとしていることもまたここでは充分留意されねばならないであろう。彼は他の論文の中で、このことを更らに明快に次のように述べている。

「現在あるような近代の国民は、固有の力を通してのみ生れたのではない。また個々の国民の諸性格は、単に固定化されたり、与えられたり、また幾世紀を通じても不変のものではない。諸国民は寧ろ、広汎な文化共同体の中で成長し、且つ精神的財産の見通しえない部分はそのから生じ、それと共に絶えず流れる交互作用の中で更新され変化する」。かくて「国民国家は、歴史的的前提及び前段階として、まとまった統一国家を一般にもっている。この統一国家

は、封建制度、及び、国家生活を無数の小さな政治的生活圏へ、即ち、多かれ少かれ独立的な諸領邦国家、莊園制並びに都市へと分裂した中世のギルド精神との斗争の中で形成された」。これをドイツについてみても、「ドイツ国民性」というものは、与えられたものというよりも、寧ろもつと何か課せられたものである<sup>(1)</sup>。

われわれは更らに、マイネッケの Nation についての所説を、「世界市民主義と国民国家」の中に探ねよう。

「一つの国民が自己發展するための第一前提は、国民が一つの確乎たる領土的基礎、即ち『祖国』を獲得することである。…永い期間を通じて、かつて本国、即ち祖国を所有し来ったものだけが、経験的に、より確実な團結、及び、より豊富な内容を獲得すべきであつたし、また保持することを知っていた。かかる豊富な内容はどのような根から生ずるのかを問うならば、人は即座に二つの大きな群を形づくらねばならないであらう。人々は、凡ゆる即座になさるべき留保にも拘らず、諸国民を文化国民 (Kulturnation) と国家国民 (Staatsnation) の二つ、即ち、特にある何らか共通に體驗された文化財の上に立脚しているものと、特に共通の政治史や制度の結合された力の上に基づいているものとにわけることが出来る。共通の言語、共通の文学や宗教は、文化国民を作りあげ、纏合するところの最も重要且つ効果的な文化財である」。だが、「宗教、国家及び国民性の関連もまたしばしば緊密で」あり、「文化国民は同時に政治国民でもありうる」から、「文化国民と国家国民とを嚴密且つ慎重に區別出来ないように、外面的にも區別することは出来ない。スイスの例が示すように、真の国家国民の内部では種々の文化諸国民の一族たちが生活しうるし、また更らに文化国民は、大ドイツ国民の例が示すように、その内部で多数の諸国家国民<sup>(2)</sup>が成立するのを見ることが出来るから」である。

われわれはここに、マイネッケの極めて特異な、然し余りにも周知となつた文化国民と国家国民の Nation に対する二つの概念を興味深く見出すことが出来る。

然らば民族・国民の形成には、どのような段階、推移があるのか。またその際国家と個性は、どのような関係にあ

ると説かれているのであろうか。

「民族・国民への意志は、当時（一七八九年―著者）先ずフランス国民を、而して十九世紀に入ってはドイツやイタリア民族をも把えたが、また大陸における大きな諸国家国民の新らしい形成にも導いた。然しながら国家国民への意志が非常に強力にどっと出たこれらの新らしい時代の前に、民族的な意志が未だそんなに意識的且つ断乎として昂まらなかった時代、即ち完全な意味における民族自決については論外であった時代、然しフランス人やイギリス人は、既に一つの国家且つ文化国民であり、ドイツ人やイタリア人は、少くとも文化国民であったような時代が先行していた。かくてわれわれは、近代の偉大な諸国民、即ち国家並びに文化諸国民の発展の中に、一つの重要な切れ目に出会う。即ちわれわれは、前期と後期とに区別することが出来るが、前期においては、諸民族は全体的に、より植物的、且つ非人格的な存在と成長をもっており、後期においては、民族の自覚された意志が目覚め、民族が自ら―たといったその指導者の機関を通じてであるにせよ―偉大な人格、偉大な歴史的統一体として感じ、且つ発展した人格の表徴と権利、即ち自治を要求する」。これを要するに、フランス革命以前の民族・国民形成にとって「決定的なことは、それが絶対主義的なものであれ、貴族的・議会主義的なものであれ、上からの国家造りであるということである。そしてその国家造りは、大部分心ならずも、より古い特徴をもった国家国民及び国民国家をつくった」。然し「近代の国民観念の時代に、個人主義的な自由活動の時代が直接先行し：国民は、いわば自ら個性に高まるために自由な個性の血を吸った。自由で創造的な個性の創ったすべてのものは、国民の全体生活を更らに豊かで独特で、個性的なものにしたことによって、常にただちに現実の国民に役立った。個人の、より大きな積極性に正確に相応したものは、国民の、より大きな積極性である。また、近代の国民観念の最も積極的な形態が近代の国民国家思想となった。全く新らしい国民国家が、数世紀を通じて文化国民として栄え来った民族から成長した。国家は一つの理想的、超個人的な全体人格であるという国家についてのわれわれの考えと配慮とを、すべて支えている高く且つ是認された認識は、共同体

感情及び個々の市民のエネルギーが国家の中へ持ち込まれ、且つ国家を国民国家に変えた時、始めて充分に獲得された」。更らに言えば、「古い国民国家には、民族の、より深い範囲からの自発的運動が欠けていたが、新らしい国民国家は、それを寧ろ余りにも豊富にもっており、また別々に努力し、国家へ干渉しようとする分派の結集に疲れてしまふ。然し運動へのかかる過剰は、個人や社会の豊富な分化を源とするものだから、近代的な国民国家の課題は、また対立をなくし、民族文化を平均化することではありえず、ただある根本的見解の一つの共通性、及び種々異り、且つ多様でありつづけていたものの相互の寛容と是認、即ちいわば民族的な年齢のある一定時期にとつての神の平和というべきものを得さえすればいいのである。このような課題が、ただ多少とも解決されたとすれば、近代的国民国家は、古い国民国家よりも、もっと困難で、而も恐らく、より高度な仕事をなしたと誇つてもよいであろう」。

ここでは、この書と同様、マイネッケ自ら、一九〇一―六年のシュトラスブルク時代既にその構想をもったと語る、彼の三部作の一つ「歴史主義の成立 (Die Entstehung des Historismus)」<sup>7)</sup> となつて完成した歴史主義的な考えの萌芽も認められ、一入闚心をそそられるが、われわれは更らに、この著の表題となつた世界市民主義と国民国家、人類と民族・国民、ないし世界と国家等の関係についてのマイネッケの見解を辿らう。

「民族・国民の本質は、個々の人格の本質と同様に、近隣との軋轢や交換を通じて形成されるものである。かくて諸民族と諸国民国家の接触は、互いに個々の發展を最も深く規定することが出来る。個々の歴史的契機、即ち諸国民相互の生活の中の個々の出来事は、個々の民族と個々の国民国家の自己生活を、従来働いて来たその發展傾向からは決して絶対に予想も出来なかつた軌道に、實際のせることが出来る。勿論民族の特性の中には、外からやってくる影響にも一定の限界がおかれることがありうる。：然し外からやってくる特徴的な諸契機が、個々の民族や個々の国民国家の發展過程を本質的に規定しようという事實は疑うことが出来ない」。「ところで、このような外からの影響は、自らの中に更らに因果的な関連をもつ諸民族及び諸国家の共同体生活の行為以外の何物であろうか。勿論、多数の民

族や国家を統合するかかる、より高度の共同体の限界、及びこれらの諸共同体は、自己自身の中で非常に流動的且つ不確定であるため、歴史的研究の中では、民族的なものや個別国家的なものの世界に、世界的な世界を直ちに対立させようとする特徴ある言語の使用がつくり出され、またそれは更に、全体的な世界史は、本来一つの大きな独特の過程であり、民族的且つ世界的な発展の力強い組合せ、並びに交叉であるとの見解に導いた。「既に個人と環境との間の精神的な摩擦の中に、即ち個々人が民族・国民の領分からただ自己に特有なものの領分へたかまろうとする努力の中に、個人的財宝は決してそう簡単なものではなく、また常に個人が断じて放棄出来ない民族的領分の一片の根の土を携帯してはいるが、同時にそれを得ようとする者に、純粹に人間の財宝としてのみ現われることが出来るから、しばしば世界的要素が存する」。かくて、「充分な認識をもって民族の自治の上に基礎づけられたヨーロッパにおける最初の偉大な国民国家、即ち革命のフランスこそ、正しく十八世紀の胎内から、即ち世界的で且つ世界市民主義的な理念をもって徹底的に満たされた地盤から、突然現われたのではなかったか」と説くマイネッケは、更に直ぐこれにつづき、本書の中心課題たるドイツについて探ねようとする。

「このことは、ドイツにおいてもまた、国民国家的觀念の成立が、世界的な理念と民族的な理念の間のかかる緊張から起ったのではないかとの問いを示唆する。勿論わが国民においても、世界市民主義的思維の時期が、民族的及び国民国家的理念の目覚めに先行したというのが普通の見解である。……だがそのような普通の見解は、世界市民主義と民族的感情とを、同時に宛かも二つの排他的で、ただ争い、互いに交替する思維方法のように対立せしめるものである。このことは、より大きな関連について訓練され、また何れの理念発展の中の最も内面的な連続性の説明を求める歴史意識にとって充分たりえない。確かに、より鋭敏で、またドイツ的教養の担い手によって常に高く保持せられて見解というものは、真実の、即ち最善のドイツ的な民族感情は、また超民族的な人間性をもった世界市民主義的理想をも包含している、また、『単にドイツ的であるということは、非ドイツ的なことである』とするものである。

この見解は、確かに、より真実に近づいているが、然しそれは、必ずしも存在しなかった世界市民主義的理念と民族的理念との間の一つの調和を要求し、且つその内部の和解と協調の困難で曖昧な経過を無視している。従って、近代ドイツの民族觀念の成立の中における世界的理念と民族的理念の眞の關係を指摘することがわれわれの主要課題であろう」とされ、マイネッケは、いよいよそれが具體的解明を、第一編「ドイツ国民國家觀念の發展における民族、國家及び世界市民主義」の第二章「七年戦争以後の民族及び国民國家」以下の諸章<sup>(9)</sup>について、深く広い識見をもって試みているが、「われわれが考察した諸理念は、二つの大きな源から流れ出たものであり、その理念の中の民族ないし国民的な要素と世界的な要素、政治的と非政治的な要素の特有な合金は、二つの重要な原因から、即ち一方では、精神的・生活の内面的傾向から、また他方では、世界狀態の大きな印象と刺激から理解すべきであるということが」、彼の論究の帰結でありそうである。マイネッケによれば、「ドイツ精神は、現実の中にも理念を見、且つ現實を理念に従って形成しようとする新しい要求の中で、民族・國民の觀念を、なお極めて世界的な気分において把え、また一つを他で満したのであった」<sup>(10)</sup>。

本書「世界市民主義と國民國家」の第二編にあたる「プロイセン國民國家とドイツ國民國家」は、「既に出来上ったプロイセンの國家個性と、生成しつつあるドイツの國家個性の二つの國家個性の争闘を敘述しようとする試み<sup>(11)</sup>」の現われであり、それ自体また当然色々の問題をもっているが、右のような観点から、あるいは広くマイネッケにおけるNationの問題を見る場合、殊に以上長々と紹介した第一編の第一章「民族、國民國家並びに世界市民主義についての一般的考察<sup>(12)</sup>」が特に注目さるべきは、いうまでもあるまい。

「世界市民主義と國民國家」の前年發表されたマイネッケの論文「ドイツ民族觀念の成立史から (Aus der Entstehungsgeschichte des Deutschen Nationalgedankens)」が、ほぼこれと同じ主旨のものであることは極めて自然であり、殊に、ここにも文化國民や國家國民など彼の特異な概念が用いられ、また世界的・世界市民主義的なものと民<sup>(13)</sup>

族的・国民的なものとの関連が論じられているのを知って注意をひかれたが、ともあれ、以上主として「世界市民主義と国民国家」に抛りつつマイネッケの Nation 理解の仕方を見来った私には、当然彼のその際の問題意識が次に問われねばならない。蓋し、ゲッツによっても、マイネッケも、「われわれが生き且つ克服しなければならぬ」、また考えながら、悩みながら、更らには行動しながら、共に斗い來った時代の一個の生命である」と述べられているように、厳しい歴史的現実との絶えざる苦斗、対決を怠らなかつたマイネッケには、Nation の問題も、徒らにただ単なる歴史の問題としてのみ考察されようとはしなかつたことが容易に想像されうるからであり、また今の私にとって、マイネッケにおける Nation の問題の焦点は、彼のドイツを中心とした民族・国民に対する歴史的把握そのものの当否への厳密な分析、検討にあるよりは、寧ろ、彼が何故かかる問題に真剣且つ執拗に取り組もうとしたかを見ることにあると思われるからである。

この点で、短い論文ながら、「国家主義と民族理念 (Nationalismus und Nationale Idee)」は、何らか解明の鍵を与えてくれるのではあるまいか。

- ① Hofer, Einleitung des Herausgebers zu "Meinecke, Die Idee der Staatsräson, M. W. I. München, 1957." S. VIII など三  
部作とは、第一に「Die Idee der Staatsräson in der Neuere Geschichte」第二に「Die Entstehung des Historismus」を  
指すことである (Hofer, loc. cit.)。またマイネッケは、その回想録の中で、「一九〇七年に出版された著作『世界  
市民主義と国民国家』と云ふ (Meinecke, Strassburg, Freiburg, Berlin, 1901-1919. Stuttgart, 1949. S. 41) が、ラ  
イノルトの「フリードリヒ・マイネッケ図書解題 (Reinold, Friedrich Meinecke Bibliographie)」や「フロムクハンス (Der  
Grosse Brockhaus)」その他には一九〇八年初版とあり (Reinold, op. cit. München, 1952. S. 1. Der Grosse Brockhaus,  
Bd. 7. Wiesbaden, 1955. S. 650) それに従った。少くとも第一編と第二編を一つに纏めたものは、一九〇八年初版ではある  
まいか。

- ② Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat. 7te Aufl. München, 1922. SS. 1-2.

- ③ このことは既に「拙稿「フイヒテにおける national なもの」「西洋史説苑」(一)四〇一頁、または拙著「世界史の成立」一八

六頁でも若干触れた。

- ④ Meinecke, "Grundzüge Unser Nationalen Entwicklung bis zur Reichsgründung Bismarcks" in Preussisch-Deutsche Gestalten und Probleme. Leipzig, 1940. SS. 7-9.
- ⑤ Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat. SS. 3-4.
- ⑥ Meinecke, op. cit. SS. 5-6. SS. 8-11. S. 13.
- ⑦ Meinecke, Strassburg, Freiburg, Berlin 1901-1919. SS. 46-47.
- ⑧ Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat. SS. 16-20.
- ⑨ Meinecke, op. cit. S. 23. ff.
- ⑩ Meinecke, op. cit. S. 162.
- ⑪ Meinecke, Strassburg, Freiburg, Berlin 1901-1919. S. 41.
- ⑫ Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat. S. 1. ff.
- ⑬ Vgl. Meinecke, "Aus der Entstehungsgeschichte des Deutschen Nationalgedankens" in Preussen und Deutschland. München, 1918. S. 178. ff. ひびた | 千〇廿年「Belhagen und Klasings Monatshefte」に發表された。
- ⑭ Meinecke, op. cit. SS. 190-91.
- ⑮ Goetz, Friedrich Meinecke. Leben und Persönlichkeit. H. Z. Bd. 174. Heft 2. S. 231.
- ⑯ Meinecke, "Nationalismus und Nationale Idee" in Politische Schriften und Reden. M. W. II. Darmstadt, 1958. S. 83. ff.